

助成番号：611

招へい目的：第11回日本野生動物医学会大会におけるシンポジウム (アジアネットワーク)での講演および猛禽類にお ける日本・ロシアの共同研究打合せ

外国人研究者名：Dr. Vladimir Vladimirovich Romanov

国 籍：ロシア連邦共和国

所属機関・職名：Green Parrot Bird's Hospital, 獣医師

外国人研究者招へい助成申請者：佐々木 基 樹 (獣医学科助教授)

1. 目 的

日本の研究者、獣医師、学生に対する野生傷病鳥獣のリハビリテーション技術指導と野生動物医学に関する研究打ち合わせと情報交換、および、ロシアにおける野生鳥獣の獣医学の現状に関する講演

2. 期 間

平成17年9月13日～23日

3. 場 所

帯広畜産大学、帯広市とかちプラザ、釧路湿原野生生物保護センター、旭川市旭山動物園

4. 内 容

近年北海道やロシアに生息する大型猛禽類であるオオワシの鉛中毒の問題が深刻化してきており、国境を越えた隣国研究者とのテレメトリーやタグによる個体追跡調査や疾病に関する情報交換などの必要性が生じてきている。今回、第11回日本野生動物医学会大会(大会長：山田純三帯広畜産大学名誉教授、副大会長：小菅正夫旭山動物園園長、会場：帯広畜産大学およびとかちプラザ、後援：帯広畜産大学、帯広市、環境省等)にあわせて、ロシアにおいて傷病鳥獣の治療と研究の第一線で活躍されているウラジミール・ウラジミロビッチ・ロマノフ博士を野生動物医学に関する研究打ち合わせ、情報交換、技術指導および講演を目的として招へいした。ロマノフ博士は、モスクワのGreen Parrot Bird's Hospitalで主に鳥類の治療に従事し、また、Russia Birds Protection Societyの副会長もされており、野生動物医療の研究の場では鳥獣問わずに幅広く活動されている獣医師である。

今回、猛禽類における日本・ロシアの共同研究を確立するための打ち合わせを帯広畜産大学で行なった。この研究打ち合わせには帯広畜産大学から、私を含め、福井豊教授、柳川久助教授、押田龍夫助教授、学外からは齊藤慶輔氏（猛禽類研究所代表）、渡邊有希子氏（猛禽類研究所副代表）、藤本智氏（おびひろ動物園）、森田正治氏（道東野生動物保護センター）の参加があった。また、帯広畜産大学、釧路湿原野生生物保護センター、旭川市旭山動物園において獣医師や獣医学を専攻する学生を対象に傷病鳥獣の治療に関する技術指導を行なって頂いた。

帯広畜産大学の後援で、第11回日本野生動物医学会大会のシンポジウム、アジアネットワークⅡ「極東の野生動物医学」が帯広市とかちプラザで開催され、このシンポジウムではロマノフ博士を含めた3人の研究者（獣医師）が講演を行なった。シンポジウムは各シンポジストの講演に引き続き総合討論形式によって質疑応答がなされた。ロマノフ博士は「ロシアにおける野生鳥獣の獣医学」というタイトルで発表を行なった。内容は、バイカル湖やカスピ海におけるアザラシの伝染性感染症（ペスト）、西ロシアにおけるキツネ、タヌキ、ヨーロッパケナガイタチでの狂犬病発症例、ポロネツシュ保護区でのキツネ、アナグマのトリヒナ感染症などロシアで問題となっている野生動物の疾病に関する幅広い内容のものであった。また、オークスキー国立公園でのソデグロツルの野生復帰の実情などの発表もあった（写真1、2）。また大会講演後に、この大会講演でのスライドにさらに幾つかのスライドを加えたかたちでの講演会を釧路湿原野生生物保護センター内において獣医師や学生を対象にして行なった。さらに、北海道の野生動物のおかれた現状を少しでもロマノフ博士に理解してもらうために、襟裳岬や広尾水族館などにおいて地元のアザラシ研究者に多くの問題点を解説していただいた（写真3）。

この度のロマノフ博士の招へいにより、技術指導、講演に参加した獣医師、学生、そして野生動物を研究する研究者にとって我が国の傷病鳥獣の治療法や調査・研究のありかたを比較検討する貴重な機会を得ることができたと考えられる。さらに、この度ロシアとの野生動物医学に関する共同研究の基礎を築くことができたことは、国境を越えて伝播する伝染性疾患などに対する早急な対処が可能なシステムの構築を可能にすると考えられる。

この度、このような機会を与えていただきました財団法人帯広畜産大学後援会には心より感謝いたします。

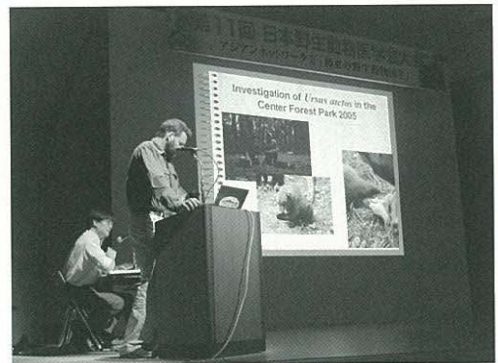


写真1. ロマノフ博士の講演風景



写真2. 総合討論でのロマノフ博士



写真3. アザラシの食害を撮影するロマノフ博士